慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ワーレン・ C・ スコヴィル フランス経済におけるユグノー教徒
Sub Title	
Author	渡邊, 国広
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1955
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.48, No.3 (1955. 3) ,p.247(63)- 249(65)
JaLC DOI	10.14991/001.19550301-0063
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19550301-0063

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

リヤ共產黨と社會黨とはしつかりと手を握つたのである。

一九二一年イタリヤ共產黨が建設されてから、約十五年にしてようやく反ファッショ統一戰線は成つたわけである。しかもこれより先、フランス共產黨と社會黨との間にも、統一行動に關する協定が結ばれ、いわゆる人民戰線政府が組織されるに至つた。やがて一九三六年のスペイン動亂は、ファシストが勝利をしめたために、人民戰線は失敗したのだが、とにかくこの時期になしとげたイタリヤ共產黨の事業は偉大であつた。統一戰線こそファシズムを倒し、民衆の心をつかむことを共產黨も社會黨を學んだことは、それからのイタリヤ社會主義運動の上に影響をあたえた。一九四三年、ムッソリーニが倒れたあと、共產黨もバドリオ政府に參加したことは、この教訓にもとづいていたのであつた。現在のイタリヤ社會黨と共產黨との統一戰線が、たんなる理論の上だけでなく、苦しい實踐とにがい經驗を通じてきずき上げられたものであつたことを、讀者は知ることができたであろう。

※　※　※　※

わたくしは以上ヒルトン＝ヤングの著書を通じて、イタリヤにおける社會主義運動の歷史のなかに、ファシズムのほんとうの姿をとらえようとこころみた。ファシズムはどんなにおそるべきものであるか、それは、いかなる思想も宗教をも否定する暴力的なニヒリズムであり、文明の敵である。そしてわれわれが最も眞劍に考えなければならぬことは、ファシズムが、一九三〇年代の問題であるばかりでなく、實に今日の重大な問題であることである。それゆえ、民主主義に忠實であろうとする者は何人も、ファシズムに反對しなければならない。

——一九五四・一一・二四——

〈追記〉　わたくしはこの書を讀んだとき、著者、ヒルトン・ヤングの人となりについて知ることができなかつた。ところが、最近、勞働黨首アトリーの自敍傳を讀んだとき、ヒルトン・ヤングは、後のケネット卿であり、第二次マクドナルド內閣の保健相をつとめた人であることがわかつた。(C. R. Attlee; As it happend, his autobiography, p. 7)

書評及び紹介

ワーレン・C・スコヴィル
『フランス經濟におけるユグノー教徒』
Warren C. Scoville "The Huguenots in the French Economy, 1650—1750" Quarterly Journal of Economics, August 1953, pp. 423—444.

一

ナント勅令の廢止によるユグノー教徒の亡命は、ルイ十四世の治世の末期におけるフランスの經濟的衰退の重要な原因と看做されて來た。しかし從來かかる主張に對して納得の行く說明が試みられていない。ユグノー教徒の亡命がフランス經濟に如何なる影響を及ぼしたかについては、依然として再吟味を必要とする段階にあるといわなければならないのである。

しかし以下において紹介されるスコヴィル氏の論文は、依然として再吟味を必要とする段階にあるといわれるこの問題に對して速答を與えようとしたものではない。同氏の論文は、フランス經濟のなかでユグノー教徒が占めていた地位について言及したもので、ユグノー教徒の亡命がフランス經濟に如何なる影響を及ぼしたかという終局の問題を解明するための手懸りを與えようとしているに過ぎない。スコヴィル氏のことでの直接の問題は、ユグノー教徒が經濟面で著しく活動的であつたという證據があるか、もし活動的であつたとすれば、この事實を如何にしたら最もよく說明することが出來るかの二點であろう。

二

ナント勅令によつてユグノー教徒は自由な經濟活動を保證され、フランスの各地において顯著な經濟進出を實現することが出來た。當時、「この國の商工業の三分の二は彼等の手中にあつた」と信じられていた程であつた。ユグノー教徒の盛んな經濟活動についてスコヴィル氏は次の事實を指摘している。

最初、その商業活動について。ボルドー港のユグノー教徒は葡萄酒貿易を獨占し、またアメリカ貿易において重要な活躍を示していた。ボルドー經濟においてユグノー教徒が果していた役割は重大であり、「もしこの商人のうち若干がいなくなれば、現狀から推し、貿易にとつても非常に不幸であろう。何故なら、大部分の貨幣を持ち、ボルドー港の貿易の壓倒的部分を引受けていたのは彼等であるから」といわれた程である。ラ・ロシェルもユグノー教徒の重大な經濟中心の一つであつた。ここを根據としてユグノー教徒は海運業を獨占し、また附近のロッシフォールに基地を持つフランス海軍に對し物資を供給していた。知事の報告は、ラ・ロシェルにおけるユグノー教徒の經濟的地位について、「この地方の貿易は新教徒の手中にあり、誰も現在においては大きな損害を蒙ることなくこれを彼等の手から奪うことが出來ない。何故なら舊教徒は貿易を遂行するだけ强力ではないから」と述べている。ナントのユグノー教徒は外國商社の代理人として活躍していた。メッツにおいて新教徒は卸賣業の獨占者であつた。またリヨンの新教徒は商業に從事し、巨大な財產を蓄積していた。

次に、その工業活動について。二人のユグノー教徒によつてカアンには織物工業が發達し、「この二人のユグノー教徒の勤勉も設備も持たない」舊教徒には到達することの出來ない程の

繁榮を示していた。スダンの新教徒は全市の織機の半數以上を所有し、「最も富裕な住民」として重視されていた。毛織物工業の他の中心地についていえば、例えばアヴヴィル、エルブーフ、ルーヴィエルにおいて新教徒の進出が特に顯著であつた。またツール、リヨンの絹工業、ナント、ランヌ、ヴィートレの麻工業、オーヴェルニユ、アングモワの製紙業についても新教徒の盛んな進出を確認することが出來る。リヨンにおいては新教徒を中心に印刷業が發達していた。

最後に、その金融業について。特にリヨンに在住したスイス國籍の新教徒は金融業者として著名であつた。パリ有數の銀行家は悉くユグノー教徒であつた。また新教徒で國家財政に介入する者も多く、シュリー、ルイ十三世、マザラン、コルベールの時代を通じて政府財政の重要な職務は新教徒の獨占するところであつたといつても過言ではない。

かかる事實からユグノー教徒がフランス社會のなかで重大な地位を占めていたと斷定することは困難であろう。ユグノー教徒の活躍に旅行者や役人が多大の關心を寄せ、從つて史料のなかでユグノー教徒の名前や事蹟が最も頻繁に現われる可能性が大であつたと考えられるから、殘存する記錄は「信頼し得る實態を示さない」としなければならない。しかしスコヴィル氏によれば、ユグノー教徒の活躍を示すこれらの史實は、「ユグノー教徒がフランス經濟の發展に對しその人口に不釣合な影響を與えていたという見解を十分に支持する」ものであつた。少數者の割にその影響力が大であつたとスコヴィル氏は考えるのである。

三

當時、「新教徒は數の上で國民の僅か十分の一に過ぎなかつたけれども、その富や勤勉から判斷すれば、少なくとも全體の八分の一を占めていたことは確實である。二百萬の新教徒は三百萬の舊教徒に相當する」といわれ、とにかく第十七世紀の後半から第十八世紀の前半にかけてユグノー教徒はフランス經濟のなかで重大な影響力を持つていたのであつた。何故ユグノー教徒は經濟的に成功することが出來たか、宗教と經濟的進出との關係は偶然に過ぎないのか、それとも合理的な根據を持つのか。スコヴィル氏はこの問題について如何に説明しているだろうか。

もとよりスコヴィル氏は、新教の倫理とフランスにおけるユグノー教徒の經濟的成功との間に直接或いは間接の因果關係が存在することを認めようとしないのではない。スコヴィル氏にとつて、ユグノー教徒の經濟的進出を可能にした理由は、むしろほかにあつた。そしてこの方がより重要であつた。かかる理由の第一のものとしてスコヴィル氏は、ユグノー教徒がフランス社會のなかで差別待遇を受けていたという事實を擧げている。ナント勅令によつてすべてのユグノー教徒はあらゆる專門職・公職・營利活動に參加することを認められたが、裁判官・高級軍人・行政官になることは第十七世紀を通じて徐々に制限されるようになつた。一六六四年にルイ十四世は、ユグノー教徒に對して許された職業の範圍を極端に制限している。またナント勅令が廢止された一六八五年以來、ユグノー教徒は非常に限られた職業にしか從事することが出來なくなり、このため一部のユグノー教徒は亡命を餘儀なくされた。かかる差別待遇は、スコヴィル氏によれば、個人や集團の行動に對し非常に有力な刺戟を與えるものであつた。ユグノー教徒はかかる抑壓のためにその全精力を、僅かに許された商業・工業・銀行業に傾倒するようになつたのであり、かくてフランス社會のなかで重大な經

濟的勢力を形成するにいたつたとスコヴィル氏は考えるのである。「異教は營利心を助長する」。

ユグノー教徒が經濟的に進出し得た理由の第二は、スコヴィル氏によれば、ユグノー教徒は財産を獲得して後も依然として商工業に從事し續けたことである。當時、「誰もユグノー教徒を、・・・自由な職業である商工業から誘惑することが出來なかつた」といわれ、商工業が財産を得て貴族になろうとした舊教徒の態度と全く相違していた。ユグノー教徒は商工業に從事し、商工業を自分等の「考察の唯一の對象」と感じていた程であつた。もとよりユグノー教徒のかかる態度が、經濟活動以外に生きる道を絶たれていたという時代的環境から大きく影響されたことはいうまでもない。

理由の第三のものとしてスコヴィル氏は、他國の商人が好んでユグノー教徒と取引關係を結んだ點を擧げている。特に新教國の商人はフランスのユグノー教徒のみを取引の對象として選び、このためボルドー、ラ・ロシェル、ナント、ルアンの舊教徒は外國貿易から締出され、甚だ不滿であつた。またユノグー教徒の商人はその息子をヂェネヴァ、イングランド、オランダその他に送り、代理商人として活躍させ、かたわら商業上の新技術を習得させていた。工業上の新技術を海外に學ぶことにおいてもユグノー教徒は極めて積極的であつた。從つてフランスでいち早く新技術を採用することが出來たのはユグノー教徒であり、この意味でも經濟的進出を容易に達成し得る條件は十分に備わつていたのであつた。

四

既に明らかな如く、嚴重な就業の制限からユグノー教徒は商工業に向うことを餘儀なくされ、商工業に專從して顯著な經濟的進出を示していた。しかしスコヴィル氏はこの論文で、ユグノー教徒の經濟進出の事實を指摘し、そしてこれを可能にした理由について言及したに止まり、ユグノー教徒の盛んな進出がフランス經濟全體のなかで如何なる意味を持つものであつたかについての詳細な説明は次の機會に讓つている。ただスコヴィル氏は、ユグノー教徒がフランス經濟のなかで占めた地位が如何に大であつたかについて、ナント勅令の廢止によるユグノー教徒の亡命を直接の契機として若干の都市で深刻な經濟不安が起つたことを指摘するに過ぎない。特に織物都市サン・カンタンにおいて混亂が甚だしく、「最も富裕な住民」の亡命で稅收入は激減したといわれた程であつた。多くので記錄はサン・カンタンについてその慘狀を詳細に傳えている。（渡邊　國廣）

G・ルカーチ著、城松登一松敬三譯『實存主義かマルクス主義か』

周知のように、ジェルジ・ルカーチ（Georges Lukacs）は現代のすぐれたマルクス主義思想家である。ハンガリヤの首府ブダペストに生れて、ドイツの大學でヘーゲル哲學を專攻した彼は、哲學者でありながら同時にすぐれた文學評論家でもあることは、たとえばバルザック論、スタンダール論、ゾラ論、ドイツ文學小史、ゲーテとその時代、若きヘーゲルなどの著書によつても明らかであろう。それゆえ「實存主義か、マルクス主義か」と題する本書では、著者のマルクス主義思想への深い理解と文學的な教養とによつて實存主義に對する內在的批判が試みられている。彼の思想は深く、ひとおりの通讀では容易に理解しがたい點もあり、本書の全般にわつて紹介と批評をすることはむづかしいので、ここではただ、マルクス主義思想家としてのルカーチが、現代のインテリゲンチヤの間に問題となつ